東京大学 21世紀COEプログラム
心とことば — 進化認知科学的展開

News Letter

No. 2 July 2004

21st Century COE Program
Center for Evolutionary Cognitive Sciences at The University of Tokyo

ことばを通して心を見たい

伊藤たかね
（総合文化研究科・
言語情報科学専攻・副拠点リーダー）

ことばはヒトの心の本質を覗き見るための最良の窓である、という意味のことを言っているのはノーム・チョムスキーですが、ことばこそがヒトをそれ以外の生物・無生物から区別する最大の特徴だと考え、多くの言語科学者が言語の普遍性と多様性の解明をめざして格闘してきました。同じ道を長く歩いていると、ともすれば自分が研究対象とする細部についてのテクニカルな議論にばかり目が行きがちになるけれど、ヒトとは何かというこの興味の「根っこ」を時に思い起こしてみることが大切だ、と思っています。本COEのプロジェクトは、まさにその原点に立ち戻る大きな機会になりました。

私自身は、失語研究をきっかけにして脳科学や認知心理学に興味を持ち、理論言語学の中では境界領域と目される部分にある程度目配りをしてきたつもりでした。それでも、このCOEが動き始めて見ると、遺伝子の塩基配列や内分泌など、全く守備範囲にない話が飛び交い、目を白黒させてしまうこともしばしばです。

これは、私だけの問題ではないでしょう。少なくとも日本では、言語学から見て認知科学や心理学はまだまだ距離のある学問ですし、進化となるともっと遠い。けれども、「ヒトはなぜヒトなのか」という根元的な問いは共有しているはずですし、実際、世界的にはこれらの領域は融合に向けて既に大きく動いています。幸い、国内でもこの数年は、認知科学関係の学会で言語関連の発表が増え、言語科学関係の学会で心理・認知科学よりの研究成果が公表される機会も多くなり、機は熟していると思われます。COEプロジェクトにおける責務として、言語科学と他の領域とをつなぐ道を少しでも拓いて行くことができるように、力を尽くしたいと思います。

とは言っても、具体的に何をすれば良いのか、まだまだ暗中模索です。とりあえず、COEラボが完成し、脳波計測装置が稼働し始めるのを機に、「言語と脳」に興味を持つ院生の交流が始まりつつあります。言語学なり心理学なり、それぞれの基盤とするバックグラウンドをしっかりと持った上で、正しい意味での学際的アプローチを身につけた若手研究者の誕生が期待されます。そのような環境で育つ人々とともに、諸領域の融合の上に立つ統合人間科学の創生という、本COEの目標に一歩ずつ近づいて行きたいと思います。

Contents

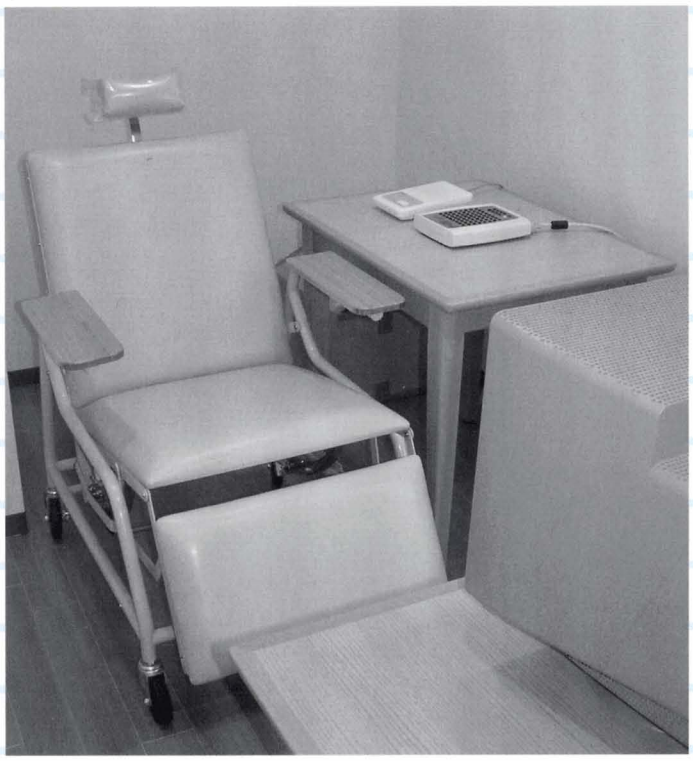
ことばを通して心を見たい……1
新オフィス・ラボ紹介……2
研究者紹介……4
プログラムの近況……5
これまでの活動報告……6

新 オフィス・ラボ紹介

2004年4月、駒場キャンパス新17号館１階に本COEの新センターオフィス（約180平米）がオープンしました。新センターオフィスはオフィス・スペースとラボ・スペースから構成されています。オフィス・スペースには事務スタッフおよびポストドクターのメンバーが常駐しており、日々の業務、研究に勤しんでいます。

ラボ・スペースは、脳活動計測、認知心理実験、行動観察・インタビュー、乳幼児調査・観察など、認知科学・言語科学におけるさまざまな実験的研究に利用できることを意図して設計されました。事務スペースに隣接して脳波測定室、認知心理実験室、行動観察室の3室が配置され、別室（事務スペースの北側に隣接）には乳幼児実験・観察室および会議スペースが配置されています。以下、それぞれの部屋の特徴について簡単にご紹介致します。

脳波測定室は、脳波（EEG）を測定するための部屋で、電子機器などによるノイズを抑えるための電磁シールドが全面に施されています。脳波計としてはNeuroScan社の64ch SCAN Workstationおよびポータブル型の40ch SCAN-Aq Workstationが利用できます。壁面には簡易防音が施され、実験に使用する外部機器との接続用コネクタボックスも取りつけられています。また前室側の壁には液晶シャッターが埋め込まれており、測定室の外（前室）から液晶プロジェクターを用いた刺激提示が可能です。測定室内の様子はモニタカメラおよびインターフォンを通じて観察することができます。



脳波測定室

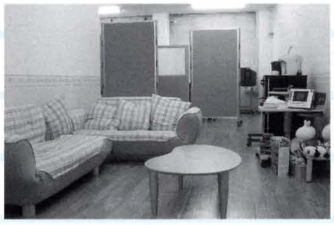
認知心理実験室は、脳波測定室とほぼ同じ大きさ・形をしており、設備も電磁シールド以外はすべて同じになっています。

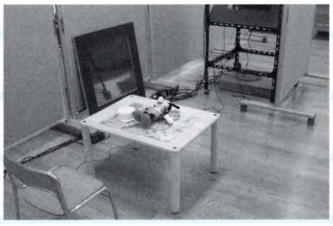
行動観察室は、リビングルームのような居心地の良い壁紙、絨毯や自然光を採り入れるための窓などが設置されており、実験協力者がなるべく自然に振舞えるような配慮がなされています。比較的ゆったりとしたスペースなので、2人以上の実験協力者を対象とした行動実験なども十分に行えます。実験協力者の行動を観察するために、実験協力者に心的負担をかけにくい形状および防音処理をした特殊カメラ（日本事務光機製）が2箇所に配置され、天井にはマイク・スピーカーが埋め込まれています。この映像や音声は隣接した操作室で観察、記録することができます。また観察室と操作室の間にはマジックミラーが設置されており、実験協力者の行動を直接観察することも可能です。

行動観察室

操作室

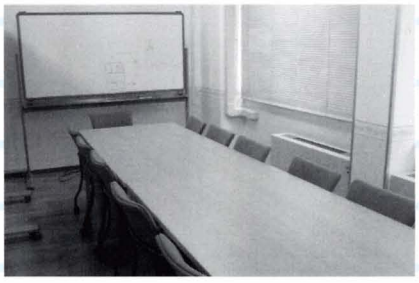
乳幼児調査・観察室は、子どもや赤ちゃん、保護者の方々がリラックスできるように、 動物のイラスト入りの壁紙を用いた明るい部屋にしてあります。床には断熱材および厚めのビニールカーペットを敷いて、子どもが裸足で歩いたり赤ちゃんがハイハイしたりしても冷たくなくまたけがをしにくいような配慮がなされています。清潔感を保つために、汚れがつきにくく抗菌仕様の素材を全体に用いています。部屋の入口付近にソファを置き、実験・調査の説明や赤ちゃんの休憩などを行うスペースとして利用しています。実際の調査などは、簡易防音が施された隣接の実験・観察スペースで行います。乳幼児調査・観察室の奥には、会議スペースがあり可動式パーティションで仕切られています。小規模のミーティングやゼミなどはこのスペースで行うことが出来ます。



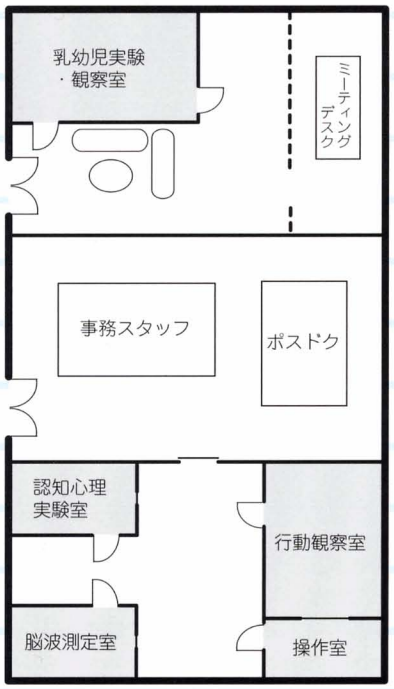


乳幼児調査・観察室

新センターオフィスの機能を十二分に活かして研究に邁進し、本COEの更なる発展を目指していきたいと思います。



会議室



新センターオフィス
オフィス・スペースと
ラボ・スペース

研究者紹介（その2）

船曳 建夫（人間進化学部門）

研究内容を一言でまとめると?

私の研究内容は、多岐にわたっている、といえば聞こえはよいのですが、日本近代から、戦争、バレエ、食欲、までバラバラなので、一言で言えば、「一言で言えない」ということになります。ただ、すべからく人間の情と欲に興味があります。

COEでは主にどのような研究を行う予定ですか?

COEでは、品川区にあるＮＰＯ法人の運営による幼保園（幼稚園・保育園）、そして他の品川区の幼稚園と目黒区の保育園、の計三カ所で、乳・幼児の食行動について明らかにし、そのデータから人間の食行動における自然性と文化性の関係を解明しようと考えています。その調査研究の内容を簡単に説明すると以下のようです。（1）園児たちが、新たな食物を食べる時に獲得される文化的行動のプロセスを、乳・幼児の観察とインタビュー、および幼稚園、保育園で世話をする人や子どもたちの親とのインタビューによって明らかにする。（2）上記のプロセスのなかで、「食べられない」ものが出来ていく点について特に注目し、食べられないものとは何か、それを克服するとは何かを考察する。（3）乳・幼児たちの文化・社会的環境としての幼稚園、保育園の「食」についてのイデオロギー、特に乳・幼児たちに関わる大人や親の「食べられない」、「食べず嫌い」といった価値観について明らかにし、そうしたイデオロギーが乳・幼児に対して持つ力を検証する。（4）こうした日本の乳・幼児の状況を、社会・文化状況の異なる他の近代社会、英国、あるいは米国のそれと比較することで、上記の三点における日本の特質と、人類の普遍的な性質を明らかにする。

大堀 壽夫（統合言語科学部門）

研究内容を一言でまとめると?

言語学、その中でも意味論、言語類型論、および談話分析と呼ばれる分野に興味をもっています。研究対象とするのは、主に複文（基本的な伝達上の単位である「節」の結びつき）で、その構造にはどのようなタイプがあるか、それらはどのような伝達上の機能をはたすか、また構造上のタイプと機能上のタイプとの対応に、各言語を通じて一般化できる相関はあるか、といったことを調べています。加えて、その延長として、談話（特に物語の産出）において一連の出来事がどのように言語化されるかを、異なった言語の比較を通じて研究しています。

COEでは主にどのような研究を行う予定ですか?

大きく分けて三つあります。一つ目は複文を中心とした類型論的研究。これは今までの研究を発展させようとするものです。最近は論理接続語に対応すると思われる形態の多言語比較を行っています。論理的にはどちらが基本的ともいえないANDとORですが、多くの言語で分布の非対称性がみられることがわかりました。ANDについては特定の形態をもたない言語も多く、均一性が低い一方、ORについては特化された形態をもつ言語がきわめて多いのです。また、歴史的な発達経路も大きく違っています。このように、言語形態の分布からヒトの「認識のマップ」を特徴づけることを考えています。二つ目は、Christine LAMARRE氏のプロジェクトに参加する形で、移動事象が物語の談話の中でどのように表現されるかを調査したいと思っています。三つ目は、将来への布石として、物語の談話に限らず、できるだけ多様でかつ品質の高い談話データを収集したいと思っています。この二つについては、幼児の発達研究や高機能自閉症の研究グループと連携しつつ行いたいと考えています。また、留学生のみなさんとも協力し、多様な言語からの談話データを集めて将来的にアーカイブ化することも視野にいれています。

加藤 恒昭（計算言語科学部門）

研究内容を一言でまとめると?

自然言語処理という情報科学もしくは計算機工学の一分野を専門としています.人間の言葉（自然言語）を計算機で扱い，色々と面白いことを実現しようというのが信条です．現在の関心は，どんな質問にも答えてくれる仕組み，質問応答システムの実現です．現在のウェブ検索は欲しい情報を含んだページを教えてくれますが質問応答では情報そのものを答えます．与えられた質問を解析してどんな情報が回答として必要かを同定し，大量のテキストを検索分析してそれが含まれている部分を正しく抜き出します．「COE『心とことば』のリーダは誰ですか？」という質問にずばり「長谷川寿一」と答えさせるのが目標です．

COEでは主にどのような研究を行う予定ですか?

計算機が自然言語をより賢く処理するためには，言語学で得られた知見や知識を計算機が理解できる形で表現し，使えるようにすることが必要です．この点で自然言語処理は本質的に学際的です．本COEでは，心理言語科学部門の伊藤たかね氏と協力して，動詞の意味に関する知識である語彙概念構造（LCS）をとりあげ，これを計算機で利用可能な形に整理し，大規模なLCS辞書を構築しようとしています．計算機が利用可能な，動詞や形容詞の意味のネットワークへと繋げていくつもりです．

顔をさらしてもう後には引けないLCSプロジェクトメンバー
（左より，坂本，畠山，伊藤，加藤）

プログラムの近況
(2004年3月～6月)

前号から約４ヶ月。毎週のように、次々と新しい出来事や催しがあるので、あたかも1年以上経ったかのような気持ちである。3月のハイライトは、各種の国際シンポジウムや講演会であった。国際ワークショップ「社会脳の探求」は、ＰＤ，院生など若手が一体になって準備、運営にあたってくれた。海外からのゲスト2名が来日直前に骨折したり、入院したりといったアクシデントはあったものの、2日間のプログラムは熱気に包まれて終わった。国内外の参加者からは、ぜひ来年もという声が相次ぎ、顔表情をはじめとした社会情報の脳内情報処理についての関心の強さが実感できた。言語学関係の国際交流も活発に行われ、オフィスにはさまざまな国の言葉が飛び交った月であった。

国際ワークショップ「社会脳の探求」

３月末には、待望のオフィスとラボが完成した。別の紹介記事にあるように、180平米のフロアは、１）オフィスとＰＤワークスペース、２）赤ちゃんラボと小セミナー室、３）シールド室、観察室を含む認知研究ラボの３つに別れて使用される。拠点形成という目標が、その第一歩として目に見える形で実現できたのは喜ばしい限りである。4月から新規雇用のＰＤも加わって、桜の花のもとでの引越しも無事すみ、ラボはさっそく稼動を始めた。6月4日にはそのお披露目をかねて、オープンラボが開かれた。高校生や一般の方を含む学内外からの多数の来訪者があり、オフィス前ホールでのポスター展示とラボでの実験デモンストレーションを通して研究活動をご紹介した。

引越しのひとコマ

二年目に入り、研究面ではさまざまな異分野交流が実際に動き始めた。言語学と脳科学のクロスオーバー、発達科学とチンパンジーの脳機能測定の共同研究、臨床心理学と内分泌行動学の統合など、新しい研究の芽が育ちつつある。

東大駒場キャンパスでは約7000名の１，２年生が学んでいるが、次世代を担う若人をターゲットにした教育プログラムも始まった。その一つとして、「心とことば」というリレー講義を開講した（7月まで）。事業推進担当者とゲストスピーカーを合わせた12名が、毎回、約60分の話題提供を行った後、20～30分という長めの質疑時間をとり、約100名の受講者とのコミュニケーションを図っている。講義の後、受講者に書いてもらうミニレポートには、新鮮な驚きや期待、素朴な疑問がぎっしりと書き込まれている。さらに、総合文化研究科で展開中の3つのＣＯＥが合同して１、2年生向けにシンポジウム「人間とはなにか？　どう作られているのか？」（5月14日、午後6時から）を共催したが、こちらへも会場一杯の参加者（約150名）があり、シンポ後はミルク(大半が未成年なので)を片手に、議論は夜9時過ぎまで続いた。

オフィスでは、川田さんに代わって、4月から瀧澤恵里子さんが事務を支えてくれている。大塚さん、出口さんとの3人体制だが、よいチームワークのもと、実験に訪れる赤ちゃんやお母様方をはじめ訪れる人をいつも笑顔でお迎えしている。

長谷川寿一（拠点リーダー）

活動報告

1 COE研究発表会

第8回

PD・RA研究発表会

日時：3月24日(水)午後2：00～5：30
場所：3号館113号室（生命・認知科学科講義室）
発表者とタイトル(カッコ内は対応教官)：Katia CHIRKOVA (ラマール)中国北方語及び北京語におけるコイネー化、坂本浩(伊藤)Generative Lexicon の枠組みによる副詞の分析、岩井しのぶ(吉川)ヒトをヒトたらしめている遺伝子はあるか？(プロテオミクス手法を用いた脳の解析)、橋本貴充(繁桝)ベイズ統計学を用いた心理・教育学の現場の諸問題の解決、嶋田総太郎(開)自己認知における遅延視覚フィードバックの影響、平井真洋(開)Biological Motion知覚における神経機序：事象関連電位による検討、福島宏器(開) Imitation－related visuomotor integration: ERP and behavioral approach、松田剛(開) テレビゲームと社会脳、宮崎美智子(開) 3歳児にとっての「いま」の自己映像の認知、酒井智宏(ラマール)領域間マッピングとトートロジー、遠藤智子・古賀浩章(ラマール・大堀)移動表現の類型論に向けて

第9回

COE研究会　動物と人間の社会行動と進化

共催：21世紀COE「融合科学創成ステーション」
(代　表：浅島誠)
担当者：長谷川寿一
日時：5月29日(土)午後1：00～4：00
場所：大会議室(アドバンストラボ410室)
発表者とタイトル：松本忠夫(東京大学大学院総合文化研究科・広域システム科学系)「動物集団における自己組織化、熱帯域で最も繁栄した社会性昆虫のシロアリ」、三浦　徹(北海道大学大学院・地球環境科学研究科)「昆虫における表現型制御と社会システムの分子的基盤」、長谷川寿一(東京大学大学院総合文化研究科・生命環境科学系)「人間行動と心理の進化的基盤」

第10回

COE研究会 オープンラボにおけるPD発表会

日時：6月4日(金)
場所：駒場キャンパス17号館COEオフィス
概要：総合文化研究科の広域科学専攻の研究室公開と合わせて研究室公開を行い、PDの研究紹介のポスター発表を行いました。

オープンラボの様子：ポスター会場(左)・乳幼児室(右)

2 COEシンポジウム・セミナー

第4回

国際ワークショップ　社会脳の探求
(First international workshop on Evolutionary Cognitive Sciences：Exploring Social Brain)

担当者：長谷川寿一
日時：3月12日(金)～13日(土)
場所：駒場キャンパス学際交流ホール
概要：このワークショップでは、自己認知や模倣、顔や表情、視線認知、音声認知など、社会行動の認知的・神経科学的基盤に関する話題を中心に、国内外から新進気鋭の若手研究者を招待し、それぞれの最新の研究成果をご紹介いただきました。また、国内外の若手研究者の研究交流を目的としたポスターセッションも行いました。
話題提供者：Chris ASHWIN (Cambridge University, UK)、Magali BATTY (Université Paul Sabatier, France)、Rita CEPONIENE (University of California, San Diego, USA)、Teresa FARRONI (Birkbeck College, UK)、Tjeerd JELLEMA (Utrecht University, Netherland)、Justin WILLIAMS (Aberdeen University, UK)、梶川祥世（NTTコミュニケーション科学基礎研究所）、小林洋美（通信総合研究所）、佐藤弥（京都大学）、嶋田総太郎（東京大学）、鈴木敦命（東京大学）、千住淳（東京大学）、平井真洋（東京大学）、福島宏器（東京大学）、明和（山越）政子（滋賀県立大学）、麦谷綾子（東京大学）、山本幸子（生理学研究所）

第5回

国際シンポジウム
Morphology and Lexicon Forum 2004 (MLF 2004)

日時：3月27日(土)～28日(日)
場所：駒場キャンパス10号館3階会議室
担当者：伊藤たかね
概要：一般セッション8件、特別セッション「形態論と統語論の接点」4件の計12件の、国内外の研究者による研究発表が行われました。対象言語も日・英中・韓と多岐にわたり、質疑応答の時間がやや短く議論を尽くすことができなかったという反省点はあるものの、充実した二日間でした。この研究会は今年で10回目になりますが、発表応募者、発表件数とも今年が最多でした。60余名の出席で、一時は会場があふれるかと心配しましたが、日本における研究者が多いとは言えないこの分野で、この規模の会を催すことができたのは大きな収穫であったと考えます。

第6回

国際セミナー
北京語・共通語・北方語：文法の尺度から見たコイネー化と言語変化
(Koineization and Language Change: Pekingese, Standard Mandarin and Northern Mandarin)

担当者：Christine LAMARRE
日時：3月13日(土)
場所：駒場キャンパス10号館3階301会議室
概要：この国際セミナーは、本COE の招聘若手研究者のChirkova 氏（Leiden 大学Postdoctoral Fellow）の日本滞在（2/29-3/27）を機に企画したものです。第一部「口語データで北方語の多様性を捉え直す」で、ラマールが問題提起を行ってから、チ

ルコーヴァ氏は「北京語の口語データから見たアスペクト体系に関わる諸問題」というテーマの発表を行い、「V＋X＋場所」のX成分のあり方、その構文のアスペクト的特徴及び北京語におけるいくつかの未完了アスペクトマーカーの特徴を紹介しました。第二部「文献資料データから北方語の歴史的変遷を追う」では、竹越孝氏（愛知県立大学）が「『老乞大』の改訂から見た“着”の機能の変遷」というテーマで講演を行い、元・明・清のそれぞれの時代の北方中国語を反映する『老乞大』の各版本を題材にし、多機能の助詞“着”の歴史的変遷を分析しました。最後の講演者の李煒氏（中国中山大学・大東文化大学）は「清朝北京語資料における“給”を含む授与文」というテーマの講演で、北京語を反映する清代文献の統計データに基づき、対象とする構文について独自の分析を試みました。司会とコメントは、第一部は北京語・北方語の音韻史に詳しい遠藤光暁氏（青山学院大学）に、第二部は現代漢語のアスペクト・授与構文の研究で優れた業績を挙げておられる張国憲氏（中国社会科学院言語学研究所、東京大学）にお願いしました。ロシア・中国・日本・フランスという、それぞれ国籍の異なる発表者と一般参加者の共通語を考慮し、発表もディスカッションも中国語で行われました。

第7回

COEシンポジウム

日韓言語対照・韓国語教育国際学術発表大会

主催：(日本側) 本COE、(韓国側) BK21 梨花女子大学言語学教育研究プロジェクト

担当者：生越直樹

日時：２月21日(土)～22日(日)

場所：駒場キャンパス学際交流ホール

概要：このシンポジウムでは，日本側，韓国側各8名の研究発表，韓国の国立国語研究院パクヨンチャン氏による特講，麗澤大学梅田博之学長，前国立国語研究院院長宋敏氏による講演が行われました。両日とも70～80名の参加者があり，50人程度と予想していた主催者側としては予想外でした。参加者は日本の大学・高校の韓国語教員や大学院生でした。日本で韓国語教育，日韓対照研究に対する関心が高くなっていること，こういうテーマでまとまった数の研究表が行われるのは珍しいこと，韓国からも多くの発表者が参加していることなどが，参加者が多かった要因と思われます。今回，日本と韓国の研究者が意見交換することにより，双方の研究の状況や関心の方向を知ることができ，有意義な催しだったと思います。今回の研究発表発は，後日，本としてまとめられ，韓国で刊行される予定です。

第8回

公開ワークショップ　認知言語学の学び方

主催：東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻

共催：本COE、東北大学21世紀COEプログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」

担当者：大堀 壽夫

日時：5月1日(土)午後2：00～5：00

場所：駒場キャンパス10号館Ｌ102室

概要：研究者が専門的なテーマについて発表を行う催しは数多くありますが、新たにある分野を学ぼうとする人たちを対象とした、オリエンテーション的な集まりは、意外に少ないのが現状です。本ワークショップは、東京大学の言語情報科学専攻有志による、新たな「学び」のための集いとして開催しました。本ワークショップでは、学部学生、大学院生、および言語の認知科学に関心をもつ一般の方々を対象に、認知言語学という分野が発展してきた背景、および現代の知的コンテクストの中での位置づけについて、導入的な講演を行いました。あわせて、現役の大学院生を中心とした質問時間を設け、具体的な学び方、大学院の実際、読書ガイド、今後の方向性などについて最新の情報を共有するよう努めました。連休中で、しかも大規模な広報はしなかったにもかかわらず、日本各地から１２０人を越える参加者がありました。学生はもとより、他大学の教員や出版関係からの参加者も見られ、言語・認知系の先端研究について多くの人に知ってもらえるよい機会だったと思います。なお、当日配られた「認知言語学文献案内」はpdfファイルでダウンロード可能にしてあります。

講師および講演題目：西村義樹（東京大学・大学院人文社会系研究科言語学専攻、認知言語学）「認知言語学の発展をたどる」、堀江 薫（東北大学21世紀COEプログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」拠点リーダー、言語類型論）「言語類型論からのパースペクティヴ」

第9回

教養学部3COE合同新入生歓迎シンポジウム

人間とは何か？　どう作られているのか？　－細胞・類人猿・自我－

日時：2004年5月14日(金)午後6：00～8：00

場所：駒場キャンパスアドミニストレーション棟３階学際交流ホール

パネリスト：浅島誠（教養学部長・融合科学創成ステーションCOE）、長谷川寿一（本COE）、門脇俊介（共生のための国際哲学交流センターCOE）

司会：小林康夫（共生のための国際哲学交流センターCOE）

共催：東京大学教養学部教育開発室（東京大学COL「大学院先端研究と教養教育の創造的連携」事業）

③ COE主催・共催研究会

第8回 意味論研究会 (COE共催)

担当者：Christopher TANCREDI、日時：1月24日(土)午後4：30、場所：駒場キャンパス10号館2階202教室、発表者：斎藤衛（南山大学）、タイトル：Ellipsis and Pronominal Reference in Japanese Clefts

第9回 意味論研究会 (COE共催)

担当者：Christopher TANCREDI、日時：3月12日(金)午後3：30、3月13日(土)午後3：30、場所：駒場キャンパス10号館1階101教室、発表者とタイトル: Yael SHARVIT (University of Connecticut)、“Pronouns in Free Indirect Discourse”、Junko SHIMOYAMA (University of Texas at Austin) “Wide Scope Universal NPIs in Japanese”、James HIGGINBOTHAM (University of Southern California)、“What is Special About the First Person?”、Alessandra GIORGI (University of Venice) “From Temporal Anchoring to Long Distance Anaphor Binding”

第10回 COE主催講演会
担当者：長谷川寿一、日時：3月25日(木)午後6:30、場所：駒場キャンパス3号館1階113室（生命・認知科学科講義室）、講演者：ジェームズ・ムーア（英、オープン大学上級講師）、タイトル：メイキング・オブ『人間の進化』（ダーウィン）

第11回 COE主催講演会
担当者：伊藤たかね、日時：3月25日(木)午後4:00～6:30、場所：駒場キャンパス10号館1階L103室
講演者：星宏人氏 (University of London)、タイトル：Functional Categories, Structure Building and Theta Marking

第12回 COE主催講演会
担当者：佐藤隆夫、講師：Charles Spence (Department of Psychology) University of Oxford、日時：4月15日(木)午後5：00、場所：東京大学文学部1番大教室、タイトル：Crossmodal attention and multisensory integration

第13回 意味論研究会 (COE共催)
担当者： Christopher TANCREDI、日時：4月23日(金)午後4：30、場所： 駒場キャンパス10号館３階301会議室、発表者：荻原俊幸（University of Washington）、タイトル：Temporal Prepositional Phrases, Presupposition, and Compositional Semantics

第14回 東京音韻論研究会(TCP) (COE共催)
担当者： 田中伸一、日時：4月25日(日)午後3：00、会場：駒場キャンパス10号館3階308室、発表者：高野京子（東京大学大学院）、タイトル：Adaptation of coda consonants in Maori loanwords

第15回 東京音韻論研究会(TCP) (COE共催)
担当者： 田中伸一、日時：5月23日(日)午後2：00、場所：大阪大学文学部A27教室、発表者：田端敏幸、タイトル：英語の頭文字語に関する音韻論的考察

第16回 COE主催講演会
担当者:佐藤隆夫、講師:Michael Kubovy 教授(Virginia University)、日時　5月24日(月)午後5:00、場所　東京大学文学部2番大教室、タイトル：How Newton, Kant, and the Gestalt psychologists led us astray

第17回 意味論研究会 (COE共催)
担当者： Christopher TANCREDI、日時：5月28日(金)午後4:30、場所： 駒場キャンパス10号館2階202教室、発表者：鈴木省吾（MIT）、タイトル：Polysemy of "Mo"

第18回 東京音韻論研究会(TCP) (COE共催)
担当者： 田中伸一、日時：6月6日(日)午後3：00、場所：駒場キャンパス10号館3階301会議室、発表者：北原真冬 (早稲田大学)、タイトル：「子音のソノリティー順位を調音的に捉えるための手法の検討」(村田忠男 (九州工業大)、深澤はるか (青山学院大 /電通大) 両氏との共同研究)

第19回 意味論研究会 (COE共催)
担当者： Christopher TANCREDI、日時：6月25日(金)午後4：30、場所：駒場キャンパス10号館3階301会議室、講演者：Uli Sauerland (University of Connecticut)、タイトル：Binding in Language: A New Approach

第20回 東京音韻論研究会(TCP) (COE共催)
担当者： 田中伸一、日時：7月4日(日)午後2：00、会場：駒場キャンパス 10号館3階301会議室、発表者：山根　典子 (ブリティッシュコロンビア大学大学院)、タイトル：Bimodal Schwa: Evidence from Acoustic and Articulatory Measurements (Bryan Gick, Sonya Bird 氏 (University of British Columbia) との共同研究)

21世紀COEテーマ講義「心とことば」

平成16年度夏学期　月５限 1331教室（13号館）
コーディネータ：長谷川寿一

第1回　4月19日　イントロダクション　長谷川　寿一 (総合文化研究科生命環境科学系)「21世紀COE「心とことば－進化認知科学的展開」が目指すもの」
第2回　4月26日　石田 貴文 (理学系研究科生物科学専攻)「ヒトの生物学的位置づけ」
第3回　5月10日　岡ノ谷 一夫 (千葉大学文学部、先進科学プログラム)「言語起源の生物学」
第4回　5月17日　佐藤 隆夫 (人文社会系研究科基礎文化研究専攻)「視覚の能動的な働き」
第5回　5月24日　榊原 洋一 (東京大学付属病院)「子どもの言葉の発達とその異常」
第6回　5月31日　開 一夫 (総合文化研究科広域科学専攻)「脳と心の発達：赤ちゃん学の視点」
第7回　6月7日　丹野 義彦 (総合文化研究科広域科学専攻)「自分のこころからよむ異常心理学」
第8回　6月14日　大堀 壽夫 (総合文化研究科言語情報科学専攻)「世界の言語の分布は何を語るか?」
第9回　6月21日　萩原 裕子 (東京都立大学人文学部)「文処理の脳内メカニズム」
第10回　6月28日　矢田部 修一 (総合文化研究科言語情報科学専攻)「自然言語における意味計算のメカニズム」
第11回　7月5日　田中 久美子 (情報基盤センター図書館電子化研究部門　情報理工学系研究科数理情報学専攻)「今コンピュータにできる言語処理」
第12回　7月12日　大津 由紀雄 (慶應塾大学言語文化研究所)「言語の個体発生」

東京大学　21世紀COE「心とことば－ 進化認知科学的展開」

〒 153-8902　東京都目黒区駒場３丁目８番１号
ＴＥＬ／ＦＡＸ　03 － 5454 － 6079
東京大学内内線　44212
ホームページ　http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp
発　行　日　2004年7月10日